HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大人への移行における他世代交流の意義 ： 当別町における社会福祉法人ゆうゆうの事例を参考に
Author(s)	吉村, 遼子
Citation	社会教育研究, 34, 63-73
Issue Date	2016-06-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62301
Type	departmental bulletin paper
File Information	63_yoshimura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

大人への移行における他世代交流の意義
～当別町における社会福祉法人ゆうゆうの事例を参考に～

吉　村　遼　子*

目　　次

1. 問題意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
2. 課題設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
3. 研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
4. 調査対象の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
　4-1　当別町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
　4-2　社会福祉法人ゆうゆう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
　4-3　北海道医療大学　学生ボランティアネットワーク・・・・・・・・・・・・・・68
5. 他世代交流における若者の学び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
6. 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
＜参考文献・資料一覧＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

1. 問題意識

近年、経済活動のグローバル化に伴う影響により社会が効率性や採算性を重視した経済偏重型へと変容していく中で、その社会へ「適応」することで大人への移行を求められている若者の姿がある。学校教育の目標は将来的に経済界で活躍できる人材の育成に重きが置かれ始め、若者支援の内実は就労支援に偏りが見られる[1]。

このような経済偏重型社会が生み出す価値判断の基準は競争による排他性を強め、問題の原因を個人の能力の欠如に求めてしまう構造を生み出す。この社会システムの限界や欠陥が指摘され始めているにもかかわらず、なおも若者の内面的な発達を考慮せずに形式化された既存の枠組みへと適

* 修士課程修了
[1] 若者支援の現状と課題については、主に平塚眞樹「子ども・若者支援の政策と課題」（田中治彦・萩原建次郎編著『若者の居場所と参加　ユースワークが築く新たな社会』、東洋館出版社、2012 年）より第 3 章を参照。就労支援への偏りの他、引きこもりやニートを対象とした「ターゲット志向」であるとの指摘がある。

応させる大人への移行のあり方においては、そこに適応できなかった若者は能力のない者としてラベリングされ、排除の対象と見なされてしまう。その結果とも言える自己責任論は、社会的排除が構造的に生み出されているという事実をより一層見えにくくし、能力主義を強化してさらに競争を激化させるという悪循環に陥っている。

大人への移行、すなわち大人になるということは、社会の担い手となると同時にその当事者意識を持ち、社会の構成員として役割と責任を果たすことである。若者が大人になり社会の構成員となることは、先行世代の築いてきた文化を継承しつつ、先行世代と共に社会を創っていくことを意味する。就労はその実現のための手段であったが、現代では就労そのものが目的化した結果、若者が自己の価値を見出せぬまま労働力として消費されていくという転倒性がある。

社会の変化が激しく先行きが不透明な状況にありながらも、若者が未来に希望を持って自らの人生を切り拓き、先行世代と共に今後の社会を創っていける大人へと移行していく為に、若者にはどのような学習の場が必要であろうか。また、社会はそれをどのように支えることができるのか。既に機能不全に陥っている社会システムのあり方を問い直し、若者を育てる仕組みを再構成していくことが、現代的な課題となっている。

このような現状の中、地域で多世代が交わる取り組みが増え始め、実践現場では参加者同士の相互作用があるという認識が広がりつつある。そこで本論文では、これらの課題へのアプローチとして「世代間交流」に着目した。その理由は、第一に世代間交流が教育、医療、福祉、環境など、効率性や採算性を優先する経済社会とは対極にある分野での学び合いを中心に広がりを見せており、「人を育てる」機能を失った経済偏重型社会を乗り越える要素が垣間見えること、第二に全ての世代を対象としていることから、従来の若者支援対象の射程に含まれてこなかった若者をも包摂できる可能性を秘めていること、第三に年齢で機械的に分断された「棲み分け」によって若者と他世代との断絶が起きている現代において、若者の社会参加を促すとともに先行世代との共働を学ぶ場となり得ることによる。

しかしながら、世代間交流に関する先行研究の内容は「高齢者と子ども」に偏りがあり、「若者の不在」が課題となっている。世代間交流に若者が参加する意味は問われておらず、若者を含めた世代間交流をどのように進めるのか、および若者がその中でどのように学びを得て大人へ移行していくのかについては、まだ研究の蓄積がないと言ってよい。

2. 課題設定

高齢者と子どもとの交流に偏りが見られるものの、先行研究における間野、金田、草野による世代間交流の場の特徴に関する指摘は注目に値する。三者の主張の整理から、世代間交流における学びにはいくつかの段階があることが示唆された。

①前提として世代間交流における人間関係の特徴には「相互性」（間野、2010）と「水平性」（草野、2010）がある。
②そのような関係の中で活動することにより、双方とも何かを得る「互恵性」（間野、2010）が生じる。互恵性は世代の異なる人間が主導的行動と非主導的行動を交差させる中で発達していく過程で得られるとされる。（金田、2010）
③世代間交流による学び合いから得た知識を次の世代に伝達していくことで、次世代を育てるコミュニティの土台を強固にする「循環性」が生じる。（間野、2010）

しかし、若者を含めた世代間交流の展開の契機およびその条件については明らかになっていない。本論文では上記の展開論理をふまえ、若者の世代間交流への参加による自己形成過程とそれを可能とする条件を明らかにするとともに、若者が他世代と関わることで大人への移行にあたりどのような学びを得たのかを明らかにすることを課題とする。

以上のような問題意識と課題設定に基づき、対象としたのは北海道石狩郡当別町における社会福祉法人ゆうゆう（以下ゆうゆう）の共生型地域づくりの取り組みである。ゆうゆうでは当別町の住民が世代を超えて交流する事業を多数展開しており、そこへ北海道医療大学の学生を中心に若者が参加する仕組みが形成されている。いずれも地域福祉を基盤とした活動であり、参加する学生も福祉専攻の学生が多いが、インターンシップ的意味合いを超えて学生の成長が見られることに特徴がある。本論の趣旨は学生が他世代との交流を経てどのように自己形成をし、大人へと移行するのかという点にあるが、この事例において福祉専門職としての自己形成過程と学生自身の自己形成過程は不可分の関係にある。しかし、専門職としての自己形成過程から学生自身の自己形成過程を抽出することは可能であると考える。

3. 研究方法

世代間交流が形成される背景にある当別町の状況については当別町の統計資料およびゆうゆうが主催した「パーソナルアシスタント&ファミリーサポートシステムサポーター養成講座」の資料を参照する。ゆうゆうの概要・設立経緯と理事長である大原さんの思いに関しては法人のパンフレット、過去の新聞・雑誌の記事を参考にした。また、学生が地域活動に参加する仕組みおよび学生が実際に他世代交流からどのような学びを得て成長したのかについては、北海道医療大学の卒業生で現在ゆうゆうで働く職員２名と、北海道医療大学ボランティアネットワークに所属しゆうゆうでの活動を中心に２年以上継続して他世代と交流している学生３名（内訳：３年生２名、４年生１名）への聞き取り調査を行った。

4. 調査対象の概要

4-1　当別町

北海道石狩郡当別町は札幌から約25km離れた郊外にあり、農業を基幹産業とする町である。人口は約1万7千人で65歳以上が3割を占めており、人口減少と平行して1世帯あたりの人数も減少している。子どもの数も毎年減少しており、0歳から14歳までの人口構成比の推移を見ると、平成17年には総人口の15.1%を占めていたが、平成26年は10%を割り込み、9.9%にとどまっている[2]。さらに当別町の出生率は平成23年で1.07%であり[3]、全国的に出生率が低い北海道の中でもさらに低い位置にある。

一方、町内には北海道医療大学があり、通学のために地方から出て来て一人暮らしをする学生が住む町でもある。北海道医療大学は医療系の専門福祉大学で教職員と学生を含め2,500名が在籍しており、そのうち約1,000人が当別町で一人暮らしをしている。しかし、近年の傾向では交通の便から当別町ではなく札幌に住む学生が増えているという。

このように、当別町は少子高齢化と過疎化が進む郊外の地域である。高齢者が安心して暮らし続けることができ、若者が安心して子どもを生み育てられる地域づくりのために、今後どれだけ地域住民の力を引き出せるかが喫緊の課題となっている。

4-2　社会福祉法人ゆうゆう

以上のような当別町の課題に対し、「共生型」の地域づくりを掲げて独自の仕組みを整えてきたのが、「社会福祉法人ゆうゆう」である。前身は北海道医療大学のボランティアセンターであり、2005年にNPO法人化し、2013年に社会福祉法人となった。ゆうゆうでは地域住民の中で支援者・被支援者の区別なく、当別町の一住民として役割を担っていく人材を掘り起こすことを重視している。児童・障がい者・高齢者・学生を含む地域住民が世代を超えて有機的に交流する中で、「支え・支えられる」体験を蓄積していくことによって福祉や地域での活動に対する意識を高めることができると知っているゆうゆうの職員たちは、地域の中に世代を超えて交流を生み出す事業を数多く展開している。ゆうゆうが目指すのは、高齢者や障がい者など従来では「支えられる」立場にある人の就労を支援し地域を「支える」人材を生み出すなど、あらゆる住民が有機的につながっている地域づくりである[4]。

世代を超えて当別町の住民が出会い、有機的に交流する場として、主に次のようなものがある。

---

[2] 当別町住民基本台帳（平成27年度）による。
[3] 石狩地域保健情報年報（人口動態統計）
[4] 社会福祉法人ゆうゆうの法人パンフレットを参照した。

当別町における社会福祉法人ゆうゆうの４拠点とその中での主な事業内容

共生型地域福祉ターミナル「みんなのうた」	**パーソナルアシスタント**	地域住民が公的制度では提供できない通勤支援や買い物支援等を行う有償ボランティア制度。大学教員や福祉関係者が講師となりヘルパー3級程度のオリジナルカリキュラムを設けている。
	ファミリーサポート	0 歳から小学校 6 年生までの育児で支援を必要とする人が地域住民にサポートを依頼できる仕組み。当別町の委託事業となっている。
	ごちゃまぜサロン	子どもから高齢者までみんなで話し合い一緒につくり上げるサロン。世代を超えて交流する場であり、個人の特技や趣味、知識や経験を活かして企画し運営する。高齢者が地域に出てやりがいや生きがいを見出せる場となっている。
	福祉教育	当別町教育委員会、北海道医療大学、各種学校機関と連携して実践する拠点となっている。中学生以下の子どもを対象としたワークキャンプでは学生もサポーターとして参加する。また、毎年福祉をテーマにした「福祉まつり」を開催しており、学生が主体的な役割を担っている。（どちらも社会福祉協議会が主催）
共生型オープンサロン「Garden ガーデン」	地域住民の交流の場として、障がい者が主体となって喫茶店と駄菓子屋さんを運営している。ごちゃまぜサロンで昼食を食べる際に使われることもある。	
	一日コックさん	地域住民が「1 日コックさん」となり食事を提供する。障がい者も一緒に配膳したり注文を取るなどして働く。
	駄菓子ボランティア	高齢者が駄菓子を買いに来る小学生の遊び相手をする。
共生型コミュニティ農園「ぺこぺこのはたけ」	当別町の基幹産業である農業を通じて子どもから高齢者、障がい者、学生などあらゆる住民が集い、活動する交流拠点。 「地産地消」をコンセプトとした本格和食レストランを併設しており、高齢者や障がい者、子ども達が育てた新鮮な野菜を使った季節の味を提供している。	
放課後等デイサービスセンター「amaririsu アマリリス」	障がいを持つ子どもと地域住民との交流を図り、一人一人の子どもに個別支援計画に基づいた支援を行う。 地域の高齢者や学生がヘルパーとして活躍している。	

（社会福祉法人ゆうゆうパンフレットをもとに筆者が作成）

近年では世代間交流の取り組みが全国的にも増えているにもかかわらず、そこに若者が「不在」であることを序章で指摘しておいた。この課題に対し、ゆうゆうの場合は学生を積極的に関わらせる仕組みを形成している点に特色がある。ゆうゆうが運営する共生型地域福祉ターミナル「みんなのうた」（以下ターミナル）は当別町の社会福祉協議会とゆうゆうの職員が共働で仕事をするボランティア拠点であり、学生ボランティアの窓口としての機能を持つ。ターミナルで働く職員の中には

医療大学の卒業生もおり、学生と地域の利用者をつなぐコーディネーターの役割を果たしている。職員は 20 代が多く学生にとっては年齢が近いため、困った時には良き相談相手となっている。

ゆうゆうの組織的な発展は設立者である大原さん（現理事長）の学びと切り離して議論することはできない[5]。大原さんは学生時代に北海道医療大学で福祉を専門的に学ぶ一方で「お互いにぎこちなく、楽しくもなかった」という支援のあり方を自身に問い続けた。従来の「支援者―被支援者」という構図に代わる福祉の形を模索した大原さんは、実践の中で考え抜いた結果、「支援される側も主役になる対等な関係づくり」を目指す。それを具現化したのが 2008 年に創設された２つの共生型拠点「ターミナル」と「ガーデン」であり、この拠点整備によって従来の福祉に取って代わる「ごちゃまぜ福祉[6]」を生み出した。地域に住む様々な世代の参加によって成り立つ「ごちゃまぜ福祉」は、大原さんが学生時代から地域住民と関係を築き、大原さん自身が地域に根付くことで関係性が現在にわたり継続しているからこそ実現が可能となっている。ボランティア登録数は 2015 年 10 月現在で 1,712 名であり、大学生のボランティアは当別町と江別市の学生を含めて約 700 名が登録している。

4-3　北海道医療大学　学生ボランティアネットワーク

ボランティアネットワークは北海道医療大学のボランティアサークルであり、1 年生から 4 年生まで 60～70 名ほどが在籍する。以前は福祉を専攻する学生が大半を占めていたが、2013 年に大学でリハビリテーション科学部が新設されたのを機に、現在では福祉専攻以外の学生も数多く参加している[7]。

近年の活動内容は 18 歳以上の知的障がい者を対象に学びの場を設けるオープンカレッジや福祉まつり等イベントの企画・運営が中心となっている。特に福祉まつりは学生の普段の活動の成果を発揮する場であり、4 年生にとっては集大成として位置づけられている。また、ゆうゆうから依頼を受けて世代を超えて交流するレクリエーションを企画することもある。

当別町で学生ボランティアの窓口となっているターミナルで働くゆうゆうや社会福祉協議会の職員で北海道医療大学の卒業生はほぼボランティアネットワークの出身であり、学生時代から当別町で活動してきた経験を持つ。そのためボランティアネットワークとターミナルのつながりは強いものとなっている。上記のイベント活動の他はターミナル経由で個人的にボランティアへ参加している。

---

[5] 社会福祉法人ゆうゆうの組織図と沿革については別資料を参照されたい。

[6] 大原氏が提唱・実践する「障がい者、高齢者、ボランティア等の様々な人が交流を深め、一緒にまちづくりに関わる」福祉のこと。

[7] 聞き取り調査では 2 年以上継続して活動している 3,4 年生を対象とした結果、いずれも福祉学科の学生であった。

5. 他世代交流における若者の学び

筆者が聞き取りを行った 5 名それぞれの個人事例については紙面の関係上割愛せざるを得ないが[8]、ここでは活動当初の他世代交流における戸惑いが見られる点、他世代との交流が深まるにつれ自分の中にあった福祉の専門性に関する価値観の転換が見られる点、それらの葛藤を経て自分の将来への指針を獲得している点が共通していたことに着目したい。次頁の表は前述した視点に基づき、5 名の経験を整理したものである。

5 名はいずれも地域で他世代と関わる活動を通して、次第に自分が今まで抱いてきた福祉の概念や福祉専門職としての職業選択における価値観が変化していく様子が見て取れる。彼らはこれまで福祉は支援を必要としている・あるいは生きづらさを抱える人に対して技術的な側面から支援を提供するものといった、極めて限定的なとらえ方をしていた。しかし、他世代交流を経て福祉の対象が拡大し、単なる技術的支援ではなく地域課題として福祉を認識するような包摂的なとらえ方に変化していく。その過程で彼らは大学で学ぶ技術や知識だけが専門性ではないことに気付くのである。また、関わりを持った他世代の他者の将来を支援者としてではなく一人の人間として気遣うようになることで自分のやるべきことや今の自分にできることを意識化しており、それに伴って職業選択における価値意識も変化していた。このような転換が起こることでそれぞれが独自の価値観を新たに獲得しており、これがその後の進路選択にも大きく関わってくることになる。すなわちそれは自らの経験に裏打ちされた、アイデンティティの形成である。

これらの一連の過程は、ただ単純に学生がインターンや実習を経験することで大人の世界を覗くだけでは成立しない。インターンもしくは介護実習等の目的は学生の職場体験であり、周囲の他世代との関係は水平的なものではなく垂直的なものである。すなわち学生は一方的に教えられる関係にあり、相互に学び合う関係ではないため、互恵性が生じない。また、基本的には一回もしくは一時期に限定されたプログラムであり、その場で得た知識や経験を他者に伝達する必要がないために循環性も生じない。結果、他世代との関わりがあったとしても組織と個人の双方とも発達には結びつかない。

ゆうゆうの職員として働く道を選択した A さん・B さんへの聞き取り調査からは、ゆうゆうを設立した理事長の経験やその背景にある思いも含めて若手職員に語り継がれていることがわかる。それらのエピソードと自分の経験が交差した時、A さんと B さんは自らの学生時代における他世代交流の意味をとらえ直し、今後の自分の方向性を意識化している。その結果としてゆうゆうへ就職した彼らは、これまでの地域との関係や思いを受け継ぎ、今度は語り伝える側の人間として責任の重みを感じながら、社会を形成していく大人へと移行している。当別町においては学生も地域社会を

[8] 詳細については修士論文に記載があるので参照されたい。

形成する大切な人的資源であることを自らの経験から自覚しているＡさんとＢさんは、学生と地域の間に立ち、双方をつなぐ（媒介する）仕組みを強化するという循環を生起させた。この一連の流れは、彼らが大人へと移行し「媒介者」としての役割を確立するまでの過程としてとらえることができるだろう。

他世代交流による学生の変化（※横軸は時間の流れ）

	1. 活動当初の困難と解決方法	2. 気付きを得た主な活動	3. 価値観のゆらぎと転換	4. 職業選択の方向性
職員Ａさん（中堅）	他世代への伝え方が難しい →住民が学生を受け入れてくれた・職員（大人）に助けられていた	福祉まつり、 子どもまつり、 ワークキャンプ	もともと福祉に興味があったわけではない →この人たちを幸せにしたい	この地域が好き、この人たちを幸せにしたい →ゆうゆうへ就職し、ターミナルの拠点長を務める
職員Ｂさん（若手）	90 歳の高齢者から突き放される →傾聴から対話へ：信頼関係ができる	子どもと水泳・スキー、 高齢者男性と「親友」になる	福祉は高齢者のためのものだと思っていた →高齢者だけじゃない、人として世代や年齢は関係ない	住民同士で支え合える地域をつくりたい →ゆうゆうへ就職し、ボランティアコーディネーターを務める
学生Ｃさん（４年）	子どもの成長過程に関わる難しさ →職員（大人）に対応を相談していた	福祉まつり、 ワークキャンプ、 車いす登山ボランティア	福祉は専門的なもの →福祉は全ての人に対してのもの	精神障がい者のイメージを変えたい、福祉がないところにも福祉を広めたい →東京の精神障がい者施設を訪れ、履歴書を提出
学生Ｄさん（３年）	人見知りで高齢者や障がい児への接し方がわからない →住民が温かく接してくれて楽しく参加できるようになった	福祉まつりで「サザエさん」の劇をする	元々は看護志望、福祉は給料が低くて悩む →人の生活に関わる大きな仕事、給料の低さはどうでもよくなった	地域福祉に携わりたい、求人次第でどこにでも行く
学生Ｅさん（３年）	緊張して人とうまく関われない →住民からの些細な関わりや声かけで緊張がほぐれた	ごちゃまぜサロン、 外出支援で札幌観光、 レクリエーション企画（ゆうゆうの依頼）	ボランティアってもっと自主的なものじゃないか（受動的） →今度は私たちが大人を巻き込む側に（能動的）	都市部で経験を積み、地域の問題解決に活かしたい

学生の学びにおいては、地域住民に学生を受け入れる意識が根付いていたことで地域活動への参加が促され、ゆうゆうの他世代交流事業に関わったことを起点として成長が見られた。特にC さん・D さん・E さんがいずれも当初は福祉職に対する興味関心が定まっていなかった状態から、他世代との交流を通して自分が専門的に学んでいる福祉の概念や職業選択の価値観の転換が起き、自分の進路の方向性を見出している点は興味深い。また、ターミナルにいる若い職員を媒介して地域での活動の幅を拡大していく様子も共通しており、学生の活動や学びを支える大人の存在が大きいことがわかる。大学という閉じられた空間から外に出て他世代と出会う中でターミナルの職員や地域住民と共働し、共に共通の文化や歴史を形成する経験が、他世代の相互理解において重要なプロセスであると言えるだろう。

6. 結論

本論文の調査結果では、前述した世代間交流の先行研究における間野、金田、草野らの主張に即して学びの発展が見られた。即ち、

①前提として「水平性」「相互性」があること。
②主導的行動と非主導的行動を交差させながら活動をする中で双方が発達する「互恵性」が生じる。
③世代間交流による学び合いから得た知識を次の世代に伝達していくことで次世代を育てる土台を強固にする「循環性」が生じる。
④このサイクルを繰り返すことにより集団としての力量を高めていくことができる。

福祉を専門的に学ぶ学生であっても、上のプロセスを経て福祉の概念や福祉専門職に対する価値観が転換する経験をしている。彼らは閉じられた空間である大学から地域に出ることで、自分が机上で学ぶだけでは得られない知識や経験を教えてくれる他者と出会う。まずはこの出会う場が必要であるが、その場のあり方は双方に有機的な交流をもたらすものであることが重要である。ゆうゆうでは当別町に 4 つの拠点を出会う場として設け、他世代の人間が教え合う仕組みを意図的に創出していた。聞き取りを行った 5 名はいずれも当別町を主な活動拠点としながら、自分が一方的に支援するのではなく自分自身も活動を楽しみ、互いに学び合う中から何らかの気付きを得る体験をしている。大原さんが目指したのは「支援される側も主役になる対等な関係づくり」であったが、先行研究の言葉を借りて言うならば、水平性・相互性が前提の文化として浸透している場に互恵性が生じる仕組みを組み込むことにより、双方の世代が発達するのである。若者である学生も、他世代交流を経て発達することで大人の領域へと接近することが可能となる。

従来の世代間交流には若者が参加する仕組みがないために若者が他世代から遠ざけられており、世代間交流における若者の「不在」という課題があった。つまり、若者の参加において先行研究で述べられていた「水平性・相互性」「互恵性」「循環性」等の要素があるだけでは不十分である。数

多くの学生が参加している当別町の取り組みが一般的な世代間交流と異なる点は、「世代を超えた共働による共通文化の形成」と「媒介者の存在」である。

共働を通してどの世代も共通の体験をすることで、これまで分断されていたために接点を持ち得なかった世代が接近する。しかし、新しく活動に参加した新参者は活動当初、自分の世代の文化にとって異質な他者（他世代や障がい者）とのコミュニケーションに悩む。異質性の根底にはその世代が生まれ育ってきた時代の中で形成されてきた価値観があるが、他世代と分断され自分の世代だけで生活することが常態化している現代社会では、異質性の存在そのものに気付く機会がない。共働するためには他者と自分との異質性を認識し、それも含めた世代の文化を理解することが求められる。しかし、その文化を形成しているのが生まれ育ってきた時代である以上、他世代がその時代を生き直すことは不可能である。そのため、共通の目的に即し、同じ時間軸で共通の文化を形成していくことが必要である。

もう一つ重要となるのは媒介者の存在である。媒介者は世代間交流から構造的に遠ざけられている若者を地域社会へと引き出すきっかけを提供する。ただし、若者を含めた世代間交流が成立するためには、媒介者自身も他世代と同じ時間軸で共通文化を形成する経験を持ち、他世代交流を経て大人へと移行していることが重要な条件である。ゆうゆうの場合は媒介者が特に学生と近接した世代であることが特徴であった。媒介者は異なる世代の間に立ち、双方の世代が互いに持ち合わせていない価値観を有している。そのため世代を超えて協働するに当たり障壁となる世代間の価値観の違いを、双方の間に立って伝達することで埋める役割を果たしている。

「学校と職場」「学生と社会人」とが分断状況にある現代では特に、それまで若者世代のみで構成され通用していた常識やルール、学習が社会では通用しないということも多々あるように思われる。歳若く経験の浅い若者たちが先行世代と比較して未熟であることは変えようのない事実であるが、その未熟さを若者自身が自覚しながらも先行世代と共働してどのように社会をつくっていくのかを学ぶ場として地域がある。先行世代もまた若者の未熟さを受け入れながら、彼らにできることを任せ、役割を与えることで、若者の成長を支えることができる。

若者支援の観点で言えば、従来の若者支援では主に引きこもりやニートなどに対象が限定される点や、若者の内面的な発達が考慮されないままに就労支援を施し経済偏重型社会への適応を求める傾向にある点において課題があった。若者が他世代との関わりを通して社会を創造する主体として自己形成していく過程は、これらの限界性の突破口として意義あるものと言えるだろう。ここから導き出されるオルタナティブな若者支援とは、被支援者・欠損モデルとして若者を見なすのではなく、共に持続可能な社会をつくる仲間として認識し、世代を越えた共働を通して大人への移行を支えることである。それは言い換えれば、従来の若者支援における支援・被支援という対立関係を解消し、若者自身が人生の主体となって社会を生き抜くためのエンパワメントであると言えよう。

既に拡がりを見せ始めている世代間交流に若者も参加することができれば、他世代が若者の自己

形成に影響を与え、若者が自分の人生を生きていく方向性を見出せる可能性があることを、本論文の事例は示してくれたのではないだろうか。若者と他世代交流について今後ますます研究の蓄積がなされて実践事例が増え、世代間交流における「若者の不在」が解消されていくことを期待したい。

＜参考文献・資料一覧＞

乾彰夫『＜学校から仕事へ＞の変容と若者たち―個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店、2010年
本田由紀『教育の職業的意義　－若者、学校、社会をつなぐ』ちくま新書、2013年
田中治彦・萩原建次郎編著『若者の居場所と参加―ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版社、2012年
草野篤子・内田勇人・渡邊和成・吉津晶子編著『多様化社会をつむぐ世代間交流　―次世代への『いのち』の連鎖をつなぐ』三学出版、2012年。
草野篤子、柿沼幸雄、金田利子、藤原佳典、間野百子編著『世代間交流学の創造　－無縁社会から多世代間交流社会実現のために』あけび書房、2010年。
宮本みち子『若者が無縁化する　−仕事・福祉・コミュニティでつなぐ』ちくま新書、2012年
G.ジョーンズ、C.ウォーレス著、宮本みち子監訳、徳本登訳『若者はなぜ大人になれないのか　−家族・国家・シティズンシップ』新評論、2002年
小林文人編著『日本の社会教育・生涯教育　−新しい時代に向けて−』大学教育出版、2013年
宮崎隆志「コミュニティ・エンパワメントの論理：自立支援との関わりで（特集　臨床教育学は「学び」をどう考えるか)」日本臨床教育学会編『臨床教育学研究』2013年
宮崎隆志「協働の社会教育」北海道大学大学院教育学研究室『社会教育研究』2003年
宮崎隆志　ほか「移行支援実践におけるコミュニティ・エンパワメントモデルの開発－若者支援を中心に―」『北海道大学大学院教育学研究院　2010年度～2013年度　科学研究費補助金　基盤研究（B）　研究成果報告書』2014年
鈴木敏正　ほか「発達・学習支援ネットワークのデザインに関する総合的研究」『北海道大学大学院教育学研究科　発達・学習支援ネットワーク研究　第7号』2007年
財団法人ハイライフ研究所「世代間交流の活性化による新たなコミュニティ形成に関する研究」2005年
大原裕介「共生型事業から生まれる新たなちいきづくり（シンポジウム：共生型福祉事業と北のまちづくり　基調講演)」『北海道大学公共政策学年報』2012年
大原裕介「地域を巻き込む　共生の街づくり（当別町)」月刊誌『しゃりばり』No.362　（特集『共生型』を地域文化に)、一般社団法人　北海道総合研究調査会編、2012年4月号
厚生労働省「国民生活基礎調査」2014年
厚生労働省「脳・心臓疾患と精神障害の労災補償状況」2014年
経済産業省「社会人基礎力に関する調査」2005年
当別町「住民基本台帳」2015年
当別町「介護保険事業状況報告」2015年
「石狩地域保健情報年報」2015年
『北海道新聞』2014年11月18日朝刊（全道版）総合面
『北海道新聞』2010年6月13日生活面
『北海道新聞』2005年4月5日